



KAYAKING ESSAY BY CANOE BUM



こぎおろしエッセイ

ガリバーが行く

野田知佑

KAYAKING ESSAY BY CANOE BUM

小学館

●著者

野田 知佑

中村 征夫

●構成

BE-PAL編集部

野田 知佑

夢枕 獏

こぎおろしエッセイ **ガリバーが行く**

1990年5月10日 初版第1刷発行

©Tomosuke Noda 1990

1990年6月20日 第2刷発行

著者 野田 知佑

出版者 相賀 徹夫

発行所 小 学 館

〒101-01 東京都千代田区一ツ橋2-3-1

電話 編集 東京 (03) 230-5525

業務 " (03) 230-5333

販売 " (03) 230-5739

振替 東京 8-200番

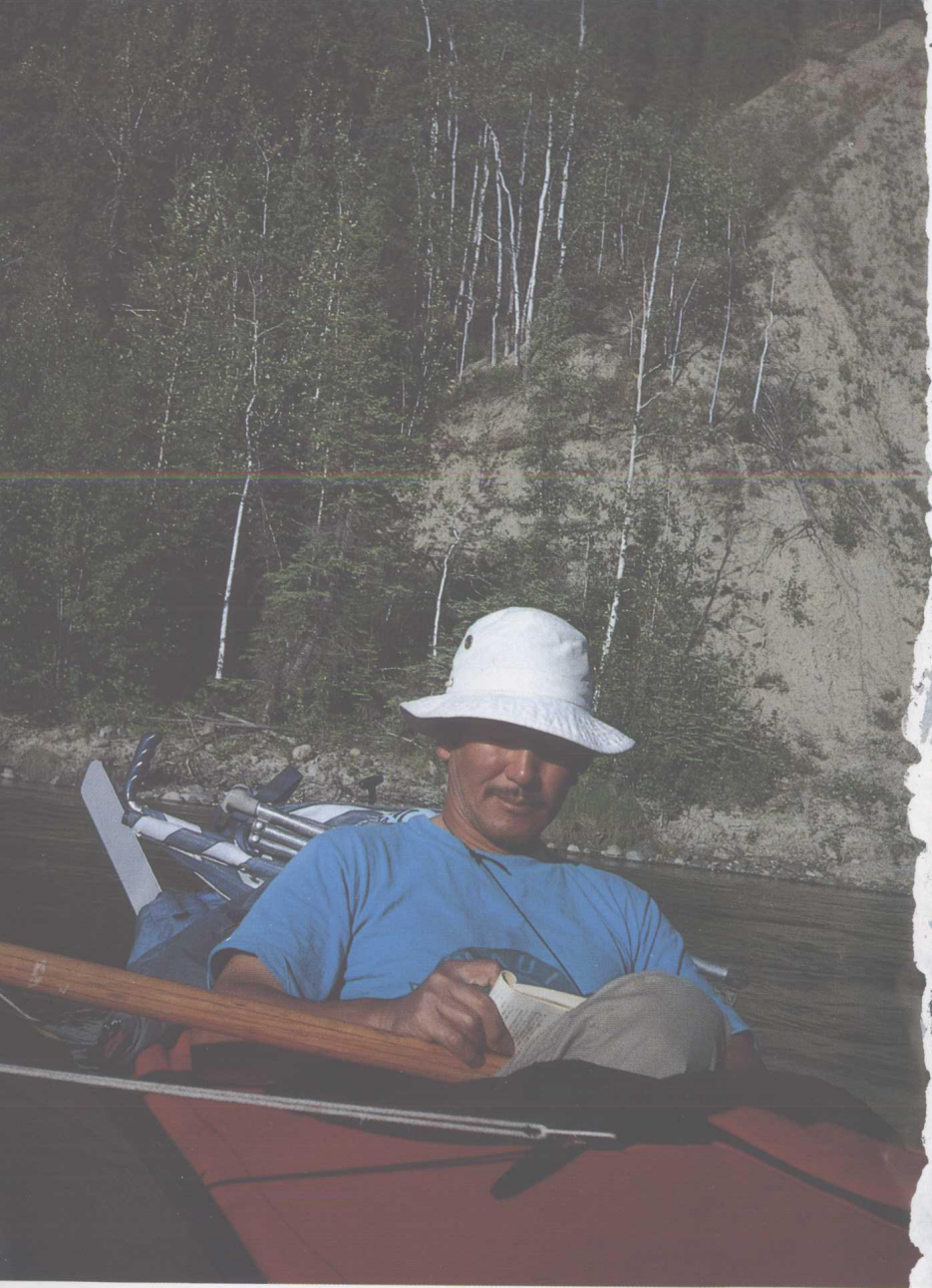
印刷所 凸版印刷株式会社

Printed in Japan

ISBN4-09-366323-8

●造本にはじゅうぶん注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたらおとりかえいたします。

●本書の一部または全部を無断で複写複製（コピー）することは著作者および出版者の権利の侵害となりますので、あらかじめ小社あて許諾を求めてください。



川の上では一番気持ちよく本が読める。





山を削りとして流れるユーコン川。時々、土煙を上げて土砂がくずれ落ちる。



チャム・サーモン（白ザケ）を開いてスジコをとり、ショージュ浸けにする。



岸近くを行くとこういう風景が見られる。
水辺に落ちて這い上がれずにいる子グマを母グマが叱りながら見守っていた。



ユーコン川に漕ぎ出す。銃二丁、本30冊、折りたたみの机と椅子、ギター、酒多量、衣類、キャンプ道具等々。これだけの荷物がみんなこのフネの中に収まる。



球磨川にて。



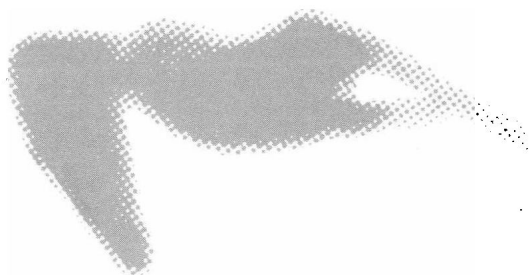
沖縄の海底でマンタを待つ。重装備の潜水は水中の動きがにぶいので、魚と追っかけっこができない。

此为试读, 需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

ガリバーが行く

こきおろしエッセイ

野田知佑



目 次

1988 winter 7

“遊び心”のない奴とは何を話せばいいのか 9

佐賀県の七山村の廃校に行った 22

初漕ぎに筑後川上流に行った 24

今に都会の川のほうがきれいになる 32

オークランドで駐車違反をすると…… 34

ガイドを雇って川を下った 44

1988 spring 47

- アリス・ファームには『ぼくの部屋』がある 49
- 強面の男が三人で何を討論しているのかというと…… 52
- 日本人よユーコン川に来たれ 56
- 始業式をさぼった少年と異常中年男の球磨川下り 61
- 大人たちが帰ると雨がやんだ 65
- 少年はまだ球磨川の激流を下っている 70
- 熊本県人への偏見は如何にしてできるか 76
- 春の釧路川を下る 81
- 人間が水に近すぎるからいけないのだ 83

1988 summer 89

- 今年はガレナを出発点にした 91
- インディアンと米のメシ 96
- ユーコン川に雨が降る 100
- ぼくはインディアンのように無愛想になり…… 106
- ホトホト自分に感心するのである 109
- 懐かしい田んぼの匂いを嗅いだような気がした 115

1988 autumn 121

ローリーの『センチメンタル・ジャーニー』 123

遭難事件の真相 128

馬鹿は死ななきゃ直らない 132

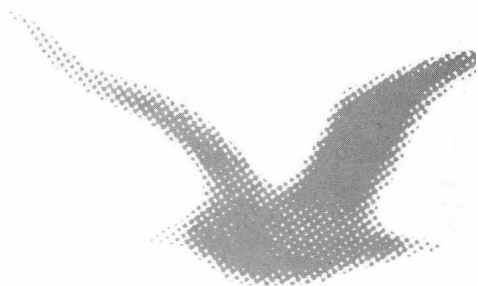
ユーコン帰りのガクの話 136

ダム湖に沈む村で子守歌をきいた 138

怪しい探検隊カイボリをする 142

ぼくたちの大運動会 150

海上保安庁から丁重な手紙をもらった 158



1989 winter 163

子供の世界は失くなったのか 165

澄んだ川の中を乱舞する魚を見せたかったのだ 168

球磨川撃沈ツアー 174

マンタを見に行く 178

『自然のままの自然』を残すには強い自制心と見識がいる 184

ふるさとは遠くにありて想うもの、なのか 187

きれいないい川で、好きなことをやると体にいいのだ 192

子供たちの歓声はどこにいったか 196

長良川を残すために 200

1989 spring 207

ガクの子供たち 209

人はどんなカヌーをしてもいいのである 217

椰子の木の下で 223

『冒険』より『遊び』の方が難しいのだ 229

●本書は月刊「BE-PAL」に1988年2月号から1989年6月号までの間連載されたものを一冊にまとめたものです（現在も好評連載中）。

装
丁
／
玉
井
ヒ
ロ
テ
ル